

## 第三回 南岳の魔人

—

むかしのはなしである。

今で言うなら中国のやや西部。鬱蒼とした森の中。

鳥もかよわぬ木々の枝の中に、忽然と影が現れた。それも一つではなく…後からぼつり、ぼつりと、まるで墨を滴らしたかのような影が三つ。わずかな木もれ日にふと照らされて、見えるその正体は——なんと人間であった。三人は、何かに投げ飛ばされたかのように、仰向けのまま落ちて行く。

しかし幸いにも、厚い枝の壁に守られて、地面に叩きつけられはしなかった。

「あたたたッ」

最初に落ちてきた男は、左の肩口に受けた強い痛みで悲鳴を上げながらもぼつと跳ね起き、左手を妙

な形にきめる。目は後から来る二人を見据えながら期を見計らい、懐から素早く丸い印を取り出すと、これを右手に持ち、掛け声一閃、

「湯風界！」

と、一陣の強風が彼の背後から吹き、前方からこちらへ落ちてくる二人をゆっくりと受け止めた。

もちろん、普通の人間にこんなことができるはずがない。彼らは、術師であった。

男は、二人が無事に降りたことを見極めると、手を解いて駆け寄った。

「麗鈴、雷…大丈夫か、ふたりとも」

声をかけられたのは、年の頃なら十六・七の少女と、さらに幼い少年である。

「ええ、平気です。…すみません、妙老師」

先に口を開いたのは、やはり年上の少女の方だった。やや茶のかかった白の一枚服。飾りの少ない、全体的にさっぱりとした衣装が、ほっそりとした体に

よく似合っている。お嬢様のおしのびのびのようにも見えなくはないが、裾からわずかに見える胡服と、あくまで動き易く作られた靴が、それをきつぱりと否定している。

少女は三人の中では唯一『風』に乗れる術師。今度も二人をつれて『風』で一氣に目的地へ…と思つた途端、何かに弾かれて、ここまで吹き飛ばされてしまつたのである。

「しかたないさ。『反風』を使える奴がまだいるなんて、考えもしなかつたからな」

妙、と呼ばれた男。齡は三十を少し越えたくらいだろうが、くすんで茶とも緑ともつかない色の袷に、薄茶の帯。といつてもヨレてはおらず、いかにも旅慣れた風情。

「いまの、『反風』って言うの？」

痛みを散らすように頭を振りながら、少年が尋ねる。こちらは濃い青の短衣の上に、ややうすめの青の衣をまとつた姿。四尺そこそこの背丈とあいま

で、自立たぬように作られている、といった風体。

「ああ、『風』に乗つて来ようとする者を追い返す術だ。しかし…こりやどうやら、俺たちにだけ効くようにしてあるようだな…」

「え？」 きよとんと見つめる少女の目を見返しなから、

「要するに、『盤印』の使い方を聞きたければ、歩いて来い』って言うんだろ。多分、印さえ持っていなければ、『風』で行けるはずだ」

ふうん、とうなずきながらも、聞き手の二人の顔が曇る。無理もない。なにせ手元の地図によれば、目的地までまだ千里はあるのだから…

## 二

術師、といつても色々々である。彼らは衝派は源流の術師。西の果て緑宝寺を拠点に、『光』もしくは『光雷』と呼ばれる命のちからを使った様々な術を用

### 3 第三回 南岳の魔人

い、この世に災いをもたらす空魔を退治すべく、日夜呪法を磨く者たち——とでも言えば格好もつくだるうが、実は単に空魔の気に弱い人間たちが、身を守るためにより集まっただけの、ただの自衛集団にすぎない。

森に落ちて来た三人の術師——妙漣、麗鈴、雷遊子もつとも、雷遊子だけは術師見習だが——は、緑宝寺の命により、旅をしている。子供の手にもおさまるほどの小さな円盤『盤印』の使い方を聞くために、『北岩の術師』の許へ向かっているのである。

三

闇の中に声がした。

『妙兄貴、行ってください！』

—— ややかすれた、野太い声。

『ここはアタシが食い止めます！』

—— よく通るが上擦ってはいない、女性の声。

『早く！妙兄貴！』

—— 力強く、頼もしい声。

『妙の兄者、あとを頼みますよ』

—— 静かな、あくまで静かな決意の声。

『このまま術を——こいつと心中なら本望です!!』

—— 言葉のわりに、なんとなく笑ったような声。

『妙兄貴！』

『妙兄さん！』

『妙兄貴！』

『兄者！』……

「うあぁッ！」

がば、と跳ね起きてから手で額を拭った。妙漣の手から流れ落ちる汗が、天幕の隙間からもれるわずかな光の中で、滝のように光っている。

光は月光、夜中である。そう、風から放り出されて、やむなくそのまま野営に入ったのだった。

(また、か)

思い出、というにはあまりにもつらい記憶。一生消えることのない……いや、消すつもりもない。己おのれの命は、あの五人のと引き替えにあるのだから……

天幕の外に目をやった。夕食の残り火が、まだ微かに残ってる。その中心から煙が細く、糸のように天へとのびて行く。糸を伝って天へ登り、彼らに会いに行きたいものだ。など取りとめもなく考えてもみる。

それでも自分はごまかせない。

もう会えない。ただ己の胸の中にのみある五つの顔、五つの声。忘れてはならない。他に知るものは誰もいないのだから……

孤独である。まわりに弟子はいても、語り合えない。仲間はいても、思いを同じにはできない。

「いや、一人いたか」

思わず口に出してつぶやいた。弟子たちは隣で寝息を立てている。聞かれる気遣いはない。

もう一人、すなわち我が老師、香こう鴻こうれん漣。捨てられていた六人の子供を、術師に育て上げた恩人。五人の弟子たちの死を、最も悲しんでいるはずの人物。

「そう言えば、お会いしていないな」

会いたい、と思ったこともあった。しかし、いまさら顔向けできない、という意識の方が強い。鴻漣は衝派師範を退しりぞいて北の地に隠居している。強しいて会おうとしなければ、会えるものではない。

考えながら、ふと目が弟子たちをとらえた。

『ろうち、ろうち……』

まだ幼い頃の麗鈴の顔が、そこにだぶる。十二年前、まだ四つか五つのこの子を育てていたころ。あのころが一番幸せだったのかも知れない。私にとっても、彼女にとっても、そして死んで行った彼らにとっても。たとえ翌日には空魔との戦いに斃たおれるとしても、その瞬間まで笑っていられるだろう。そう言い切れるだけの、充実した何か、そこにはあった。

5 第三回 南岳の魔人

奴が現れるまでは。

奴、あだ名は『南岳の魔人』。気取った名だが、この方がましだ。奴の名前など聞きたくもない。今でも、思い出すと寒気が走る。奴が為したこと。為そうとしたこと。術師として…いや、人としてやってはならない数々のこと。それを止めるために彼らは動いた。

そして、死んでいった。

(どうどう巡りだ) そう感じても、自分を責めずにはいられないのである。どうやら、また眠れない夜を過ごすことになりそうだ。

四

そのとき、妙漣はおかしな殺気があたり一面にこもるのを感じた。

「いかん、起きろ雷、麗鈴！」

僅かの時間でも油断をした自分を責めながら、弟

子たちを天幕の外に跳ね飛ばす。そうしている間に、先ほどの殺気の源へ『光』が集中しはじめた。

「結果だ！ 急げ！」

少女はさすがに師範資格を持つ術師だけあって、師の言葉に即、反応した。少年は寝起きの目をぎゅつとこすって…いきなり胸に重い痛みが走ったかと思うと、数丈ほど吹き飛ばされてしまった。

「雷！」

弟子を追おうとした妙漣もまた、唇に痛めた左の肩口へ、重い一撃を受けてしまつた。

「妙老師！ 雷ちゃん！」

「結果を解くな!!」

左腕をだらんとたらしながら、妙漣が叫ぶ。右手で弟子を助け起こしつつ、目は術のもとを追っている。

(何者だ…?)

相手が誰であろうと、危害を加えてくることに変わりはない。

(狙いは、当然…)

懐に入れた右手を、ぎゅつと握り締める。その中には、手の平に収まるほどの、皮でできた印。

封じられた術を解き放つ力を持つ『盤印』。使いたいののは山々だが、たとえ封を解いたとしても、片腕はけがで動かず、もう片腕は印で塞がっているのは術が使えない。

「雷、お前の結界で、この場をもたせるんだ。その間になんとかする！」

少年はぐつ、とうなずいて手を交差させた。こうん、つという低い音があたりを圧する。何らかの術が、雷遊子の結界に弾かれたのだ。

「なんてえ術だ！」

雷遊子の『殻』結界は、源流の中でも十指に入るほどの強力無比なもの。それを突き破りかねない術など、そう多くあるわけではない。

(だが…この術は前に受けたことがあるぞ。そう、ずつと前に…)

記憶をたどり、はっ、となにか思い浮かんだ瞬間。

再び響いた、ごうん、という音に思いががき消されてしまふ。

「きゃ…」

悲鳴の先を見る。麗鈴も結界を張るだけで精一杯の様子。

形勢有利と見たか、相手が姿を表した。まだ二十歳前と見える男が四人、各々うすい青白色の戦袍に身を包み、手におのおの違つ形の字印を携えて歩み寄ってきた。字印にはめ込まれた小さな寶石が、月の光にきらきらと輝いている。

(あれも見覚えがある。ずつと前、まだあちこち戦い歩いていた頃に…)

はっ、として頭を振る。物思いにふけっている場合ではないのは明らかである。さっきの夢が、まだ彼を蝕んでいるのだらう。

…と言つて、策があるわけではない。じりじりと迫り寄る相手に対し、睨み付けることしかできない

## 7 第三回 南岳の魔人

とは、なんと情けないことか！

しかし、いかな悪夢と言えども、数多くの実戦の中で磨かれた、彼の胆力まで奪つことはできなかった。妙連は襟を引きちぎって紐にすると、懐から取り出した盤印を左手に押し込み、腕ごと体に縛りつけた。

(腕を折ってでも…この子らを！)

その時だった。

「やめて下さいな、湯法の方々」

男たちはぎくりとして声の方を見た。妙連もぎよつとして見た。そこにいた術師たちの誰一人として、声がかかるまでその気配に気がつかなかったのだ。戦いの最中とはいえ、これは異常と言っている。術師見習の雷遊子までもが、緊張して声の先を見つめた。そこにいたのは、茅の編み笠を軽くかぶった一人の若者。薄暗い中でも、にこやかな表情だけはわかる顔。だが…なんとも言えない威圧感を持っている。

「ひ、ひっこんでろ！」

男たちの一人が、圧迫感を振り払うように叫ぶ。若者はなおもにこやかに、

「そういうわけにもいきませんでして。『湯法』をこんなところで使われては、だまっておれませんか」

言うなり、だらんとさげていた右の手を、ついと前に振り上げる。と、なにやら白い波のようなものが、手の先から男たちへ向けて放たれた。

「な…！」

言葉を発する間すらない。男たちは壁のようなものを作ろうとはしたが、それより早く、白い波に体のまわりを包み込まれた。

一人、二人…ついに全員が波に捕まったとき、敗北を悟った男たちの長が、怒りの視線で合図した。

「無念…くらえ！」

複雑な手の動きと共に、四人の体が火の球と化し、まばゆいばかりに大きく膨らんで…急に縮んでしまった。彼らが死を賭して放った術も、白い波に阻まれ

たのである。

「ああ、かわいそうに」

若者がぼつりと言う——あくまで笑顔のまま。

妙漣らは、まさにあつげに取られていた。雷遊子などは、結界を張ることすら忘れて、火の玉が消えるのをぼつと見ていた。この点、啞然としながらも結界を張りつづけた麗鈴は、やはり師範資格を持つだけのことはあると言えよう。

火の玉が消えるのを見て取り、踵をかえしてこちらに近づくと若者の顔が、月光に照らされてはつきりと見える。その瞬間、妙漣は慄然とした。

「あいつは！そんなばかな!!」

……だがあの術は漣術の『玉漣碎』だ…あれを使える奴はあいつしかいない。し、しかし…」

## 五

「すいー」

雷遊子が目をぱちくりしながら若者に近寄ってきた。若者はいかかわらず笑いながらも、ちよつと照れたように、

「いや、僕のはそんなたいしたもんじやないよ。妙兄貴に比べたら、チリみたいなもんさ」

「妙老師を御存知なのですか？」

いつのまにかそばに来ていた麗鈴が、服をばたばたと叩きながら尋ねる。

「あれ、きみは妙兄貴の弟子の女の子かい？…ずいぶん大きくなつたねえ！」

麗鈴は、おや、という顔つきで若者を見据える。若者の笑みが大きくなって、

「ああそうか、妙兄貴はあのころまだ総師範役だったから、僕らのことは紹介してなかつたつけね。僕は妙兄貴の弟子さ。」

六漣呪つて聞いたことあるだろ？ 妙兄貴はその一番上、鴻一星の妙漣。僕は一番下の鴻六星、洪漣つていうんだ」



## 9 第三回 南岳の魔人

この言葉に妙漣が跳ね起きた。洪漣の目をじっと睨みすえたままじりじりと近付き、ふっと肩を掴んで一言。

「何者だ」

その声からは、かすかに怯えに似たものが感じられた。

「いやだなあ、妙兄貴。もつ忘れたんですか？」

笑みを絶やさないう洪漣。肩をつかむ腕に力が入っても、その顔は崩れない。

「その顔であの術を使う洪漣という奴なら知っている。たしかにな。しかし、あいつはもうこの世にはいない。十一年前に、私が殺した——」

つと伏せた顔をがばと上げ、再び若者を睨んで、もう一度聞く。お前は何者だ。なぜ六漣呪のことを知っている!？」

「かないませんねえ」

若者は少しも動じない。顔の微笑みは、薄れる気配すらない。

「正直に言えば、妙兄貴の言うとおりです。僕は兄貴の知ってる洪漣じゃないんですよ。死にしまった洪漣の兄です。」

先日鴻漣老師から、弟と同じ呪名を賜りましてね。いうなれば二代目の鴻六星ってわけですね」

### 六

夜も遅い。子供たちはむりやり寝かされた。

と言つて、その好奇心がなくなるわけもない。

「ねえ、李姐。六漣呪ってなんなの？」

聞かれたのは麗鈴。緑宝寺では雷遊子と姉弟のように過ごしていたもので、今でも呪名でなく本名の「李」で呼ばれている。

「あたしも名前しか聞いたことないけど……なんでも、ずっと前に総師範を務めていた術師が、六人の弟子をみんな漣術師範に育て上げたことがあるんですって。それが六漣呪。六人揃つと、普通じゃ考えられ

ない術を使うことが出来るとか聞いたわ。聞いたときには、まさか妙老師もそうだとは思わなかったわね。『連術』だから不思議じゃないけど

まあ、これは泉老師から聞いた話だから、どこまで本当かわからないわね」

「いや、あつてるよ」

二人が起き上がると、そこには妙連が立っていた。

麗鈴はばつの悪そうな顔で

「お、おいででしたの」

「まあ別にいい。いきなりこんな話を聞いて、興味を持つなと言う方が無理だろう」

言いながら二人の近くであぐらをかく。

「ついでに言おうか？」

六連呪は各々が特殊な術を持っている。普通の術師にはまずできないような術をな。なぜできるのかは聞くなよ。私も知らないんだ。隠居された鴻連老師なら、わかるかもしれないが…

私は封じたから目立たないが、洪のはすぐ分かる

だろ…あの笑顔さ」

「へえ…」

「さっきの連中も、やつ笑顔にやられたと言っている。あの顔で敵を惑わせ、戦況を自分の思い通りに操るのがやつ得意技だ。ついたあだ名が『笑面竜』しょうめんりゅう見かけよりずっとおっかないんだぞ。

さ、気がすんだらもう寝ろ」

子供たちの天幕から立ち去る妙連の背に、「妙老師」と声がかかった。師が足を止めて振り返ると、寝巻ねまき姿の麗鈴が、足早にやって来る。

「一つだけ、教えてください。妙老師」

妙に固い調子の麗鈴に首を傾ななげながらも、師は言葉をつながした。

「十一年前に、私を泉老師の許へ預けて隠居なされたのも、六連呪が原因だという噂がありました…：…本当ですか？」

妙連はふっと寂しげに笑うと、弟子の額を人差し

11 第三回 南岳の魔人

指でつんつ、とつついた。いきなりだったので、体制を崩した麗鈴はその場に座り込んでしまう。

「子供は、寝なさい」

妙漣はそう言い残すと、焚き火の方へと歩み去っていった。

( いかないでろ、うち、いつちや、やああ!! )

心の中、幼いころの自分が叫ぶ。突然、傷だらけで帰って来た師に、いきなり泉碓の許へ連れていかれた、あのとき。頑がんとして来ることを拒むその背中。泉碓に押さえられた肩の感覚。すべて、覚えている。いまでも、はつきりと思いつける。

泉老師が言っていた。妙老師は死ぬより辛い目にあつたのだ、と。大人になれば、わかる日も来るだろう、と。

「大きくなっても…教えてくれないのね、あたしには。なあんにも——」

とぼとぼと、天幕に戻る麗鈴。その頬は、月の光

に輝いていた。

七

「しかし、洪漣の記憶まで持っているとは、驚きだな」  
弟子たちを寝かしつけて、一息ついた妙漣。いまは焚火たきび越しに洪漣と向い合っている。

「はは。私たち兄弟は、ちよつと変わっていますからな。」

ふたりとも鴻漣老師に拾われたものの、私は術師としてさほどの才覚がなかったので、最低限の術だけ学んでから外で生活くらしていたんですよ。

弟が死んで、記憶だけでなく術や性質まで受け継ぐなんて、思ってもみませんでした……」

妙漣はうなずいた。術師の…空魔に脅かされてはいるが、日々の食事には困らない生活を見たあとで、外でのくらしは決して楽なことではない。それがいきなり術師に戻ってしまったのである。その驚きは

いかばかりか——

「ところで妙兄貴、あの男の子は見たことありませんけど……？」

話題を変えたがっている様子に、妙漣は少しがっかりした。もつと話しを聞きたいところだったが、いろいろ言いにくいこともあるつ、とあきらめる。

「洪漣の記憶しかないのなら知らんでもしかたがないが……名は雷遊子。七年前、空諾どのが緑宝寺の森の中で拾った子供だ」

「あ、それじゃあ、『雷天人』の……」

「しっ……」

妙漣が思わず弟弟子の口を押さえつけた。

「余計なことだけは知っているんだな」

わざと苦い表情を作る。洪漣、笑いながらもさすがに気まずい顔で、

「……じゃ、まだ何も？」

「言うべきことじゃない。何も起こらなければ、知らなくてもいいことだ」

洪漣は笑顔を変えずにうなずいて、

「師匠らしくなりましたね、妙兄貴」

兄弟子はぶい、と横を向く。風が木々と共にその顔をなぶる。その行く先を、見るともなく追いながら、妙漣はぼつり、ぼつりと言葉を出していった。

「六漣呪はもう還つてこない。洪漣はお前が替わりにいるとしても、あとの四人はもう得られない。すべては私のあやまちだ。奴と対峙する前に、鴻老師の許を訪ねていれば……」

少なくとも、あやまちを繰り返してはいけない。あの子らを、五人と同じ目に合わせるわけにはいかな

いんだ。  
あの子らを一人前の術師に育てる。実のところ、私の今の生きる支えは、それだけなんだよ」

洪漣は笑顔のまましんみりと聞いていたが、兄弟子の言葉が途切れるのを待って、静かに口を開いた。

「お話には、二つばかり間違いがありますね。まず一つ。六漣呪はみんな生きています。もちろん、弟

を除いてですが」

妙漣の目が、かっと見開かれる。が、洪はそれにかまわず

「そして二つ目。大変残念なことです——

我らが宿敵、渴磨鵬螺は……いまだ、生きています!!」

妙漣は頭に大岩をくらったように感じた。『渴磨鵬螺が生きている』その言葉だけが頭の中を駆けめぐり、感覚も思考もすべてがなくなってしまう。

肩を揺ゆすられる感覚にふと正気にかえった妙漣が、弟子を、逆に強く揺すり返した。

「そ、それこそ間違いないのか!? あのと、奴は俺が『爆ばく天てん界かい』でたしかに葬まうつた! 奴をおさえつけた洪漣ごと、あそこにあつた人も、ものも、すべて打ち砕いたはずだ!

——もし、奴が生きているとしたら……洪漣の死は、あいつを死なせちまった俺は、いったい……!」

と、そこまで一息で言つて、はっとした。弟子の目を見て

「……す、すまなかつた。こんなことは、お前の方がよほど感じているんだよな。思わず、我を忘れてしまった……まだ修業が足りないな」

洪漣は、うなだれる兄弟子を横目にして、満足げに何度もうなずいた。

(そう、これでこそ鴻一星の妙漣だ。弟が心酔した、衝派最大の術師だ……)

妙漣の方は、下を向きながら拳こぶしを握り締め、意志を噛みしめるように、少しづつ言葉にしていった。

「奴は……奴だけは、私が倒さねばならん。お前の話だと、六漣呪は揃そろつな。それなら、なんとかなる。何があんでも、六漣呪を集めて、六人の力で奴を討うつ。他に奴をたおすべは……ない!」

自分に言い聞かせるようにそう言つと、ぐつ、と向き直つて、

「洪漣、手伝つてくれるか?」

弟弟子の笑顔が、本当に心からのものと、他人にもはつきり分かるほどになった。

「弟が死んで、その記憶と技を得てしまっても、私は術師になるつもりなんかありませんでしたよ。」

奴が生きていると知ってから、老師の許で修業を重ねて術師になったのです。すべては奴を滅ぼし、弟の無念を晴らすために――」

言い終わらないうちに、兄弟子に抱きつくように擦り寄り、首に手をすつ、と回す。そのまま手を懐へ滑らせると、なにやら薄い板を取り出した。黒く滑らかな六角の板。各頂点にひとつづつ違う色の石が埋めこまれ、中央には「漣」の一字と、それに巻き付くかのような竜が浮き彫りにされている。

洪漣は、板の上に指を二本乗せ、祈るような表情でつぶやきはじめる。

「我、鴻六星洪漣。弟に成り代わり、六漣の縛を解くものなり」

つぶやきが終わると同時に、きんつ、という鋭い

音。そして六角板の石の一つが弾け飛んだ。

「もちろん、お手伝いいたします。こんどこそ、奴の持つひとかけらの光雷までも、この世から消し去りましょう！」

## 八

こちらは衝派の拠点、緑宝寺。

静かな寺の中ほどに、ふわり、と漂うように空気のゆらぎが生じた。夜の庭をのんびりと眺めていた一人の老人が、それを見つけて近寄り、つい、と手を差し延べる。するとゆらぎはその手にまとわりつき、老人の体を震わせて音に変えていった。

これぞ衝派自慢の連絡法『風文呪』。

老人は一通り聞き取ると、懐から何も書いていない竹筒を取りだし、墨をつけた筆でささつとしたためて、受取人の許へ届けに行く。本日の受取人は、この寺の長。緑宝寺空諾であつた。

「おや、妙連どのだ」

中堂の奥、緑宝寺の居室で、竹簡を読む空諾。心  
なしか声はずんでいる。

「妙連、といいますが、かの光雷帝こうらいていですか？」

その目の前で茶を飲んでいるのは、もと透形師とうけいしの  
成阿せいあ。透形師というのは、衝派術師たちの仇敵。空  
魔の出現時期、出現場所を見透す役割である。い  
まはもう隠退しているが、緑宝寺の長老と言える人  
物であり、緑宝寺をひたすら影で支えている。

「さすがに良く御存知で。ま、本人は何も言いませ  
んが、あちこちで言われているようですな。

さて…ふむ。渴磨が…」

「渴磨鵬螺！まさか…！」

空諾がにやり、と笑って、

「衝派術師に『まさか』は禁句。そうおっしゃった  
のは成阿どののほずですよ。

——渴磨退治に行かせてくれ、と言うことよろ  
うですが、どうしたものでしょうねえ」

顔中のしわをさらに深くして、成阿は考え込んだ。

「渴磨となると、あやつは目が見えなくなるから  
なあ…」

この際、行かせてやっていいのではないかな。盤  
印のことは他の者でも間に合うのだろう？」

緑宝寺はちよつと頭を掻く。成阿がじろりと目を  
やった。空諾の昔からの癖で、隠し事を指摘される  
と、いつもこのように頭を掻くのである。

「ええ、用件そのものは誰でも構わないですが…実  
は印にちよつと細工をしましてね。それを解かない  
と…その…いつ、どの流派から攻撃をくらうか、わ  
からないのですよ」

「なるほど…」成阿の額に、薄く青い筋がいくつ  
も浮き出てきた。

「罫あとにしたらわけですな。この時期に！最も貴重な  
人材を!!」

成阿とは、空諾が緑宝寺にやってきたときからの  
つき合いになる。一流派の長となつてからも、彼に

だけは頭が上がらない。

「いえ、もともとは雷遊子を鍛えるために仕掛けたんですよ。『育てるには実戦が最もいい』というのは、私自身の経験からとも言えますし——しかしまさか、このようなことになるとは……」

「『まさか』は禁句だと言いましたぞ……まあよろしい。とにかく、応援を少し出さぬことには」

空諾はほっと、安堵のため息をついて言った。

「それについては適任の方がいます。では、その方の準備ができ次第、妙漣どのには渴磨退治に専念してもらいましょうか」

## 九

翌朝。

子供連れでもあるから、妙漣は意識して朝早くから行動することになっていた。懐かしい顔に会った翌日でも、その原則は曲げられない。……とはいえ、中

途半端な時間に起こされた子供たちは、なかなか起きられない。妙漣はやむなく、弟弟子とともに身体をほぐしていた。

「で、やっぱり北へ向かうんですか」

洪漣が笑いながら言う。

「『北岩の術師』とやらに、盤印の使い方を聞かねばならないんだ。緑宝寺の返事が来るまでは、渴磨退治には出かけられないよ」

妙漣も、仕方なさそうな口ぶりである。

「それに……あの子たちは、巻き込むべきじゃない。これは、六連呪の問題だからな」

弟弟子の笑顔が、苦笑に変わった。

「無駄ですよ。なにがあってもついて来るでしょう」

——あなたの弟子なんですから」

妙漣は、ため息をつくしかなかった。

弟子たちの仕度しどを待つて、四人が歩きはじめる頃には、もう日も高く上がっていた。森が途切れて、目



の前に草原が広がる。岩と砂と森しか見たことのない雷遊子が、わあ、と声を上げた。

「今のうちに感激しておけよ。そのうち飽きることになるからな」

あら、と麗鈴が師の顔を見た。幼い日、本当の師弟として過ごしたころに戻ったような表情をしている。

(楽しそうね)と思わず微笑んだ。

「おや？ いま何か光ったみたいだけど……？」

洪漣が指をさす。その先には、たしかにきらりと輝くなにかが見える。

「昨日の今日だ。注意しよう」

言いながら盤印を取り出す妙漣。だが、昨日と違って目がギラついていない。光は渦のように広がってそしてまた縮まっていった。そのあとに、なにやら人影のようなものが現れる。

昨夜と同じ姿の男たちと、同じような服を着た大柄な女性。それを見たたん、妙漣と弟弟子の動きが止まった。

「ま、まさか……！」妙漣の声が震えた。

「そうれん 匠漣の姐さん!?」洪漣の顔から、笑みが薄れた。

じりつ、とにじり寄るつとする湯法の男たちの目前で両手をひろげ、制した女性が口を開く。

「我は湯法、湯磨鵬螺どのの配下でこう 匠漣。命により責様らを……」

両手をぐい、と体に押し付け「光」を溜める。

兄弟弟子は各々素早く型をきめる。敵対するつもりはないのだが、体が勝手に動くのだ。術師同士の戦いになれた彼らの、悲しい性分である。

術を振るうわけにもいかず、さりとて防戦もできない——相手が手加減なしでかかってきたら、相当の結界術でも長くは持たない。それは共に戦ってきた二人が、一番よく知っていた。

迷いながらも子供たちを背中隠して衝撃を待つ。

だが、匠漣はやおらくるりと向きを変えた。

「助けに来たよっ！」

ぶわっ、と音がしそうな勢いで『光』を放つ。単純で

「威力は低いが、それだけに避けにくい術、『しょうくわんじゆ照光呪』である。」

「そんな…ば、ばかな！お前の心はずべて奪つたはずなのに!？」

決して凄まじい術と言つわけではない。しかし湯法の男たちにとつて、あり得ないことにたいする衝撃は大きかつたらしい。一人たりと、起き上がる者はいなかった。

「ずいぶんとナメたまねしておくれだね！この活布神かつぶじんがそう簡単にやられるとでも思ったかい？これからたあつぷり後悔させてやるから、覚悟をしつ!!」

右手を開いて高く空に上げ、おもむるに宙を掴むと、それをびゅん、と振り回す。何も無いはずの手から、白いものが帯となつてあふれ出てきた。

「なんだ、ありや」

予想外の展開にとまどう湯法の術師たち。そこへ向けて、白い帯がするすると伸びる。布である。宙

から湧わき出した布が、見る間に彼らを縛しばり上げてしまつ。

「妙兄さん、あとお願いね」

すつかり縛つてしまつてから、匠漣が言つ。

「『たあつぷり後悔させる』んじゃないのかい?」

妙漣はすでに型を解いて、にこやかに微笑んでいる。

「こんな簡単に捕まるやつら、相手にしたんじゃ、活布神の名がすたりますよね」

洪連の軽やかな声がする。顔は笑っているが、手は構えを解いていない。軽く頷く妙漣、つかつかと布ダルマに近寄ると、荷物の中から小さな刃物を取り出して、足の部分の布を切る。

「いまは機嫌がいいからな。さ、どこへなりと消えろ」  
布ダルマはこけつまろびつ、森の方へと消えて行つた。

雷遊子と麗鈴が、おずおずと近付いてきた。

「おばちゃん…あ、ごめん！お姉ちゃん…は、誰なの？」

「匠漣は片手でひよい、と少年を引き寄せると、その背中をぼんぼんと叩いた。雷遊子は思わず咳が出るほどむせる。加減している、とはわかるのだが、少年にとつては強烈な張り手であった。」

「子供が氣い使うんじゃないよ。妙兄さんが言ったんならケ飛ばすよとだけ、あんたから見りゃ、あたしや確かにおばさんだね。」

「あたしは鴻の三星で匠漣。あだ名は活布神で、六漣呪の中じゃただ一人の女術師さ」

「女坊にいた頃は、私の世話もしてくれたのよ」  
麗鈴が言つ。

「はっはあ。へっつにあんたあ、世話の焼ける子じゃなかつたよ。」

「じゃ…妙兄さん。そろそろ行きましようか」

「その言葉に、妙漣。しばらく、何のことやらわからない。が、ふとひらめくように前後がつながった。」

「おまえ、奴の居場所を知っているのか？」

「ええ。ダテに十年もバカの振りしてたわけじゃないわ」

「ちよつと遠いけど、みんなも待ってることだし、さうさど行きましょー！」

「悠然とうなずく匠漣が、兄弟子の手を引つ張るようにした、ちよつどそのとき。」

『それには及ばぬ』

「聞いたことのある重苦しい声。三人の術師が、ぱつと身構える。そこには、いつのまにやら、先ほどと同じ光の渦ができていた。」

「…渴磨！」

「出たな渴磨鵬螺！」

「憎悪と、わずかの恐怖がありありとうかがえる、三つの声。そんな声など気にも留めず、重い声が更に響く。」

『久しぶりだな、妙漣。』

「さあ、十一年前の続きをやるうじやないか。その」

渦を越えれば私はすぐだ。もっとも、無事に渦を抜  
けられればな…ふふふつふあつはっはっはっ…』

哄笑が少しつつ薄れてゆく。渦は逆に大きく、大  
きくなって、回りにあるものすべてを引きずり込ん  
でいった。洪連、匝連はすでに渦の中に消えている。  
消える前に、兄弟子へ目配せして。

妙漣はしばらく動けなかった。怒りと、責任との  
狭間。一瞬の迷いがあった。

「老師！」

「妙老師、早く逃げて！」

二つの声に我に返った妙漣、見れば、弟子たちが  
渦に捕まりかけている。

「い、いかん！」

言いが早いか、渦の中心へ向かって突進した。盤  
印を懐深くにしまい込み、両手を手刀に構えて胸  
の前に十字に交差。渾身の『内光』をただただ手の  
先に集めてゆく。威力は大きいが触れねば効果のな  
い剛流秘術『閃刀碎』である。

「二人とも、目をつむれ！」

渦の真ん中、弟子たちの間にくさびを打つように、  
手刀をたたき込んだ！ぐおん、っという音と、血の  
ようにあふれ出す光の中、人影が飛び込み、飛び出  
した。

人影は、共に一つ。

飛び出た人影はくらくらする頭を振った。回りを  
見ると景色が違う。しかもそこには自分しかない。

「老師！」雷遊子だった。

「くッ。ひとりだけ…か。すまん、麗鈴」

「構いません。妙老師と一緒できれば」そう言っ  
てにこ、と笑う麗鈴。本当に嬉しそうである。

「困った奴だ…まあ仕方ない。このまま渴磨退治に  
加わってもらうぞ」

そういう妙漣も、言葉ほど困った顔はしていない。

「老師い!!」

狂ったような叫び声を上げながら、雷遊子が駆け

21 第三回 南岳の魔人

込んでくる。

「来るな！」と言わざま、何かを投げつける妙漣。思わず受け取った雷、見て驚いた。

「盤印…」

「そうだ。これからはお前が一人で守れ。その使い方がわかるか否かいなで、衝派の未来が決まる。

私の弟子ならば、見事に成し遂とげて見せるんだ。いいな！」

麗鈴が渦にのまれた。妙漣ももはや頭ぐらいしか残っていない。もう間に合わない。泣こうがわめこうが。雷遊子にもそれがわかった。

「でも、どこへ行けば…」

「印が導いてくれる」

妙漣は落ち着いた口調で言った。渦はだんだん縮まって行き、喋りしゃべつらくなっているのに。

「わたしにもやっとわかった。印の使い方を伝授してくださいるのは、あの方以外にはない。

盤印を信じろ、雷！私を信じるなら、印も信じる

んだ——」

妙漣の頭が、渦に消えた。

見つめる雷遊子。だが、もう泣いてはいない。にぎりしめた印をふとはなして、宙にかかげる。自分の光をそこに集めて、願った。

（老師の言うことが本当なら——いや、信じなきゃ。盤印は、僕を北岩へ導いてくれる。きつと導いてくれる。きつと…）

呪文のように、何度も何度もくりかえした。

もう何十回、唱えただろうか。背後に光を感じて振り向いた。そこには、道があった。荒れた草原の中に、たった一本。真まっ直すぐにのびた道が。雷遊子はその道を歩きはじめた。

迷いは、なかった。

「た、たつ、大変です！」

ここは中堂。緑宝寺の中心に位置する、源流の心臓部である。その奥にある、小さな机の前では、二人の男が向い合つて茶をすすりあつていた。

男の一人、緑宝寺空諾は、駆け込んできた男を手で制して、

「そう焦らないで陶郭とうかく。まあ座つて、茶でも一杯飲んで——」

言いながら自分の口元にも茶碗を運ぶ。

「そんなことを言っている場合じゃありません！ 妙総師せうし——いえ、妙漣せうれんどのが、きつ、消えてしまいました!!」

思わずむせる空諾。その正面に座つていた男——鮑采ほうさいもぎよつと目をむく。

「『消えた』とは、どう言うことですね?」  
陶郭は緑宝寺以外の人物がいるのに気付き、やや

あらたまつて言った。

「や、これは失礼を……」

洛鮑采らくほうさいは衝派源流の術師ではない。が、数多くの流派の術を心得ながらも決して鼻にかけない彼は、緑宝寺にいるほとんどの術師たちに信頼されていた。もちろん、陶郭も例外ではない。

「なに、妙漣せうれんどのには万が一の場合に備えて、常に一人、術師を付けているんです。その方の報告によると、なにやら……その、光の……渦、のようなものが、皆を飲み込んでしまったとかで」

「全員? 雷遊子や、泉碓の弟子……麗鈴もか!？」

「は、先に麗鈴と雷遊子が飲まれ、妙漣せうれんどのはかれらを救つために中に飛び込んだとのこと。その後は残念ながら、自分の身を守るのが精一杯だったと」  
ふと空諾が顔を伏せた。しばらく腕組みをしてから、ぐいと体を起こす。

「『神足』の泉碓ほどの術師が、見届けきれずに逃げざるをえないとは——」

脇で聞いていた鮑采が、いきなり眼を見開いた。「妙漣に、泉碓ですと！かつての、衝派三頭竜のうち二人までもが!!」

軽く束ねただけの長い髪が、宙に踊る。その勢いに驚いた空諾と陶郭の顔を見て、鮑采は咳払いをすると椅子に深く腰掛けなおし、緑宝寺同様に腕を組んだ。

「……渴磨というやつは相当な使い手ですな」

空諾は苦い顔で、こぼれた茶を拭きながら

「ええ。ちよつと、甘く見過ぎていたようです。

しかし、あの妙漣どのが弟子を助けられないとは思えませんが——ほら、やはり離れていない」

どこから取り出したか、彼の手には、ちよつと収まるくらい白い玉。その中に緑の点が一つ、赤の点が一つ、寄り添うように光っている。

「どつやら、雷遊子に盤印を渡して逃がしたようですね」

ほう、と玉を覗きこむ鮑采。

「なるほど、さすがに噂通りの方だ。

しかし、先ほどの話しからすると、盤印を持つ雷くんとやらを、このままにしておくのは危険すぎますな。誰か——」

そこまで言いかけたとき、おもてでカタン、という音がした。耳を澄ますと、ぱたぱた、と小さな足音が遠ざかって行く。

「…子供のような?」

「きつと風くんでしょう」

空諾はそう言うと、こぼれずに残ったわずかな茶をすすった。

風遊子。雷遊子とは幼なじみで、同じ術師見習だが、『風』乗りとしてははるかに上。そして……思い立ったらまず手足が動くその性格。

「よろしいのですか?」と、これは陶郭。

緑宝寺は、とんつ、と勢いよく腕を置いて、いたずらっぽい目で鮑采を見る。

「よろしくない、と思うでしょう。あなたならね」

鮑采はあきらめ顔になった。

「はいはい。子供との二人旅も、ま、悪くはないですな」

脇に置いた杖をさっと取って部屋を立ち去るその姿は、しかし決して嫌そうではなかった。

むかしのはなしである